

二宮さち子

展覧会タイトル

マダマ・バタフライ “Madama Butterfly”

アーティスト・ステートメント／展覧会コンセプト

【銅版画】約15年前に自主制作をしたいと思い立った時、同時に技法は銅版画にしようと思っていた。自分はやはり線画だろう、そして描く絵も少し気持ち悪いので、間接技法の方が作品が見やすくなるだろうと思ったからである。

【「秩序」】「秩序」とは権力がそれを使って世の中にその力を染み渡らせるためのもの、秩序は制度によって作られ、維持されている。世にある様々な制度の内、私はジェンダーという制度に十代の頃からずっと関心があり、回り回ってこのような絵を描くに至った。

【少女漫画】すでに男性主導で文法の成立していた他の表現分野とは違い、1970年代に開花した少女漫画表現は、女性作家が自らの表現で自らの声を表すことができた分野だという批評がある。私が少女漫画風の絵で描き始めた時にはその点に無自覚だったが、確かに私は子供の頃少女漫画家になりたいと思っていた。

【「マダマ・バタフライ」】ブッチーニの有名なオペラ「蝶々夫人」。長崎に寄港したアメリカ人海軍将校ピンカートンに身請けされた15歳の蝶々さん。彼女にとっては永遠の愛を誓ったピンカートンであるが、必ず戻ると言い残して3ヶ月後に彼女の元を去る。その言葉を信じた蝶々さんは彼の子を産み育てながら3年の月日を過ごす。ようやく再来日したピンカートンはアメリカ人の妻を連れており、裏切りを突きつけられ全てを悟った蝶々さんは、自らの誇りを守るため自刃を選ぶ。満足な英語も話せず子供のように無邪気な蝶々さん、現実を悟り毅然とした強さを見せ、父が切腹した短刀で自害するサムライの娘、蝶々さん…オリエンタリズムにまみれたこの物語を見て、観客は彼女の悲惨な運命に紅涙を絞るという。しかしオリエンタリズムにジェンダーがぴったりと重なるこの物語が涙を誘うエンタメだというのは、苦々しいというのを通り越して、アジア人／女性にとって屈辱ではないだろうか。惨めであるが故に愛されている蝶々さんに、せめて死後は救われてほしいという思いで「被昇天」の姿を描いた。